れき　みん
となん歴民だより vol.57

Morioka tonan history and folklore museum　平成30年12月25日発行

発行　盛岡市都南歴史民俗資料館　盛岡市湯沢1-1-38　Tel/Fax 019-638-7228

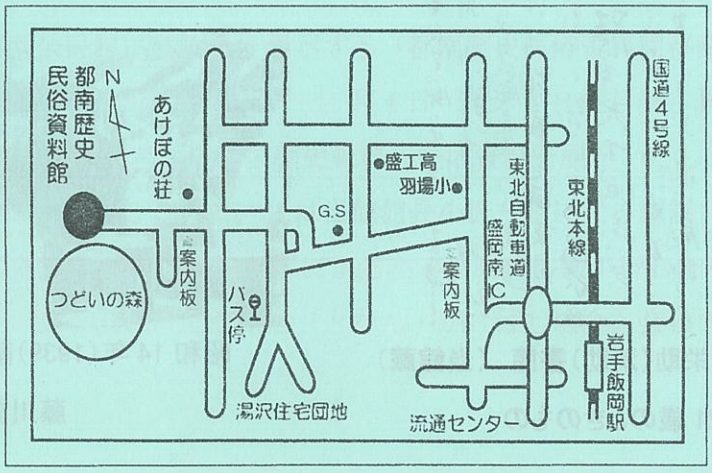
史跡・文化財めぐり　鍋倉城跡（遠野市）

是非ご来館ください。お待ちしております。

— もくじ —

○都南の素封家藤川清助（栄助）と原敬
○秋の事業報告
○資料は語る㊼
○盛岡市所在指定・登録文化財紹介㊼
○となんの昔ばなし㊼

MAP☆ACCESS



○利用案内

開館時間
午前9時から
午後4時まで

入館料
無　料

休館日
月曜日
（休日に当たるときは、直近の平日）、年末年始

都南の素封家藤川清助（栄助）と原敬

都南歴史民俗資料館　館長　小沢一昭

昨年の「となん歴民だより」Vol.52で，「原敬と藤川清助」について取り上げました。その事がきっかけで今年の都南公民館との連携事業で，もう一度聞いてみたいという要望があり，移動資料展で講話をすることになりました。そこでその内容の一部を抜粋・要約して掲載したいと思います。

●清助の書簡について

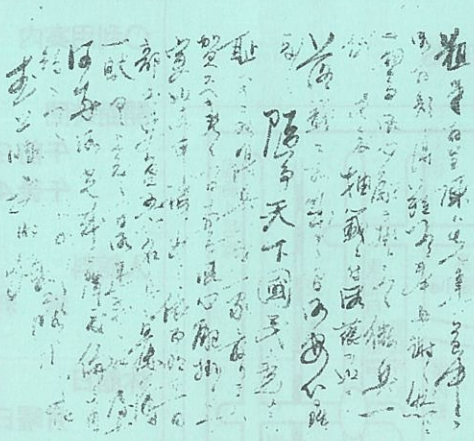
清助は，宮崎求馬（みやざきもとめ）に就いて漢学を学んだと伝えられているが，かなりの能筆家であった。当資料館には，清助が21歳の時，当時村会議員をしていた武藤文助に宛てた書簡が保管されている。内容は「心配をかけていた徴兵検査で落選し，本来は恥ずべき処であるが，家に取っては喜ばしいことである。そこで一献差し上げたいので，どうぞおいで下さい。」というようなものであるが，その書体は流麗にして大胆な運筆で見事なものである。

郷土の宰相原敬を信奉していた清助は，再びの来訪を待ち望み，松材のみで立派な離れ座敷を新築して待っていた。しかし原敬が大正10年（1921）東京駅で暗殺されたため，菖蒲田の家を訪れることはなかった。

その後清助は，大正14年（1925）衆議院選挙で初当選し，初めて中央の政界に進出したのである。そして地方自治や産業の発展に多大な功績をあげ，昭和14年（1939）には皇室及び伊勢皇大神宮に新穀を献上する「献穀田」に岩手県の代表として選ばれた。これは大変名誉なことであり，儀式には清助の息子である勇助夫妻の姿もあった。

しかし，その勇助が昭和15年（1940）急性盲腸炎になり他界したのである。その時勇助の子どもの慶助はまだ10歳であった。人望があり将来を有望されていた勇助を失った清助は，翌々年の昭和17年（1942）74歳でその生涯を閉じたのである。

現在，菖蒲田は慶助の子どもである12代清助氏が受け継いでいる。



武藤文助宛藤川栄助（清助）書簡　（当館蔵）

清助21歳のときのもの

昭和14年（1939）献穀の祭事に出席する

藤川勇助夫妻

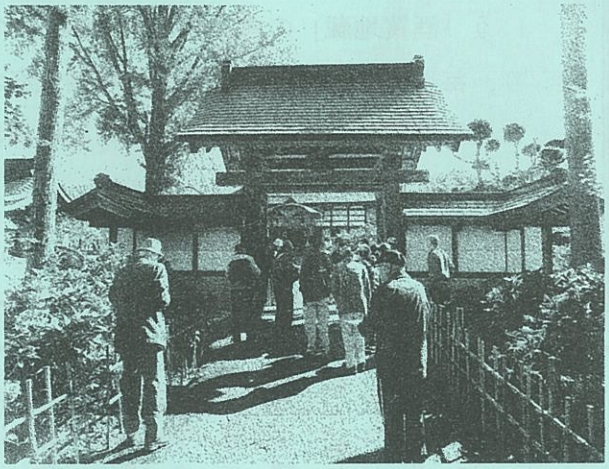
秋の事業報告

●「となん・かけはしの会」史跡・文化財巡り

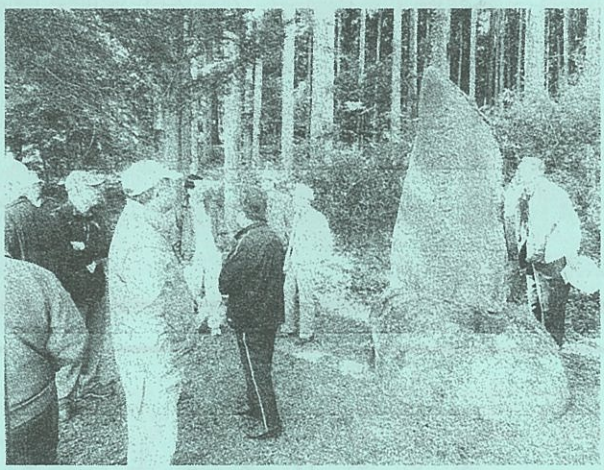
当館を事務局とする「となん・かけはしの会」の活動である，今年度の史跡・文化財めぐりは，「遠野南部氏の里遠野市を訪ねて」をテーマに，去る10月18日（木）開催されました。

今年度の行き先は遠野方面でした。当会副会長の外川靖博氏の案内で，志和佐比内代官所跡，立福山鳳仙寺，清心尼公墓所，阿曽沼氏墓所，鍋倉城跡を見学し，昼食を挟んで，遠野文化研究センターの前川さおり氏の講話を聴講し，遠野市立博物館を見学しました。当日は天気にも恵まれ，会員の皆さんは気持ちよく史跡を見学し，また，外川氏の豊富な知識と前川氏のわかりやすい解説に，たいへん勉強になったと喜んでおられました。この場をお借りして御両名に深謝いたします。

なお，「となん・かけはしの会」では，随時会員を募集しております。詳しくは，盛岡市都南歴史民俗資料館　019－638－7228まで。



鳳仙寺　山門



清心尼公墓所の碑

●都南歴史民俗資料展移動資料展　セレクション2018

当館の所蔵資料を都南公民館に移動して展示する「都南歴史民俗資料館移動資料展」は，10月27日(土)～10月28日(日)，11月3日(土・祝)～11月4日(日)の4日間開催されました。今回は，「セレクション2018」をテーマに，考古資料・歴史資料・民俗資料を展示いたしました。

また、関連事業として10月28日（日）には当館館長小沢一昭による講話「都南村の素封家藤川清助と原敬」，11月3日（土・祝）にはスゲによるハバキ制作体験が行われました。

お越し頂いたお客様，お手伝いいただいた「となん・かけはしの会」会員の皆様に心から御礼申し上げます。

資料は語る57

【桜花散文南部形鉄瓶】

盛岡の名物のひとつに，南部鉄器が挙げられる。

この鉄瓶は，南部形という形で，尾垂れに羽欠きが施されており，肌一面には，桜の花が鋳出されている。桜は日本人に好まれるモチーフで，鉄瓶にも多く用いられる。

鋳銘には「小泉仁左衛門」とある。小泉家は盛岡を代表する鉄器職人の家系で，代々仁左衛門を襲名している。藩政時代には「御釜屋」として召し抱えられ，秀麗な茶釜や鉄瓶を生み出してきた。

この鉄瓶が何代目の仁左衛門の作であるかは不明だが，盛岡に連綿と息づく伝統技術の美しさを今に伝える優品である。

盛岡市所在指定・登録文化財紹介57

市指定有形文化財

木造地蔵菩薩坐像（酒買地蔵尊）

一木造，素地仕上げの像で，江戸時代初期の地方仏師の作と考えられます。

目は彫眼で，左手には欠失していますが宝珠を載せていたと考えられます。台座は後世につけられたもので，本像の前には「御前立」として，地蔵菩薩半跏像が安置されています。

本像は，小僧に姿をかえて酒屋に通ったという「酒買地蔵」の言い伝えでも知られており，毎年７月下旬には酒買地蔵尊例大祭が，また旧暦の年越にあたる１月下旬には裸参りが行われ，広く親しまれています。

参考文献：盛岡市教育委員会『もりおかの文化財』(2008)

『大ヶ生玄蕃と大ヶ生柿』後編　となんの昔ばなし五十七

【前編のあらすじ】

斯波氏の家来に大ヶ生玄蕃という者があり、本名は川村といった。大ヶ生殿には、妾腹の長男太郎と、大ヶ生で出生した二男治郎の二人の子があった。郷の者は治郎を跡継ぎにと望んでいたが、太郎を跡継ぎに望む大ヶ生殿は、争いを怖れどちらが家督を継ぐか明言を避けていた。

大ヶ生には大ヶ生柿という種なし柿があり、種を食いあてた者には大いに幸いがあるといわれていた。大ヶ生殿は種を食いあてた者に家督を譲ることに決めた。

両人はそれをたべたのであるが、二男の治郎は、二つめの柿を食べるとその中に種のあるのにあたった。長男の太郎はいくらたべても、種のある柿にあたらなかった。

大ヶ生殿は非常によろこんで、さては家督はきまったといい、次郎※の座を上に直し、百姓どもにもその旨を告げたので一同よろこび忠誠を誓った。そして長男太郎には百石をつかわし川村という姓を名のらせ、もし大ヶ生氏に世継がなく断絶するようなときは川村より継ぐように約束したので領内はよく治まって栄えたとのことである。

※原文ママ

出典：『となんの民話』（都南歴史民俗資料館、一九八八）

参考：伊藤祐清著『祐清私記』（『南部叢書』所収）